

## これからの企業養豚に思う

本 田 英 三\*

現在考えられている企業養豚の機構を端的に  
いえば、生物工学的に豚を多頭飼育するという  
ことである。

農林省の長期見通しによると、昭和52年度に  
は豚の飼育が約1,500万頭に達するとみられて  
いる。これは昭和41年度比約300%であるから  
今後10年間に養豚数が980万頭増加すること  
になる。かりにこの増加率を年次で追ってい  
くと、昭和46年には692万6千頭、昭和47年  
で733万2千頭となり、この増加率を実現さ  
せるためには豚飼養戸数が年々激減している  
現状から、どうしても多頭化飼育の集団農場  
の建設が必要となってくる。

一方、これには膨大な資金を要することは  
当然で、国がこれらのことについてどれだけ  
行政的な配慮をするかが今後大いに注目され  
よう。

ところで、わが国ほど豚の疾病が濃厚に  
侵淫している国はないといっても過言では  
ない。すなわちSEP, AR, 豚赤痢, トキソ  
プラズマなどはすでに飽和状態に達してい  
る。

このような状況のもとでConventional豚  
による企業養豚の経営内容は疾病による悪  
影響という動かしがたい条件で、すでに評  
価が出つくしているのではなからうか。す  
なわち閉鎖的にかつ衛生環境を考慮してい  
る少数の例外的な養豚家を除いては生産  
性の低下がはなはだしい。

本年の豚肉安定価格は枝肉kg当たり335  
円であるが、一般に多頭飼育の場合、相場  
がkg当たり380円を割れば赤字になるの  
が現状である。ちなみに台湾ではkg200  
円以下、また米国で

は170円内外という低価格の現状から豚肉  
の輸入が自由化された場合、現在のConven  
tional豚による企業養豚ではとうてい国際  
競争に勝つことができない。

アメリカでは、日本とかなり事情が異なり  
、Conventional豚でも飼料要求率3.0内  
外のものもまれではない。これはアメリカの  
豚における疾病のありかたおよびヘルスコ  
ントロールの考えかたが日本とかなり異な  
っていることを示唆している。日本でも少  
数、閉鎖飼育という条件でまれにそのよう  
な豚もいるが、企業という立場からはそれ  
らを標準にするわけにはいかない。すな  
わち多頭化における豚集団では特定疾病  
のない状態で、かつ平均して能力の高いも  
のが要求される。このことからSPF豚の  
企業化への導入の必然性がでてくるのであ  
る。

また最近では糞尿公害のほかに薬品公害  
の問題がやかましくなっている。抗生物質  
による菌の耐性の問題もあって、疾病の治  
療・予防ということで、単に薬剤を多量投  
与することのみで終始するかぎり、企業養  
豚における生産性の向上を根本的に解決  
するきめ手にはなりがたい。

現状の豚に薬を多用することによっても  
生産コストの低下には限度がある。したが  
ってConventional豚とSPF豚とを比較  
すると企業養豚の場合、結局SPF豚の有  
利性がクローズアップされるのである。多  
頭飼育の場合には生産性の向上と豚の能  
力の均一性が要求されるのである。生産  
性の高い養豚を行なうためには

\* 住友商事KK 飼料畜産部長

当然品種および飼料の改良，豚舎の近代化，省力化などが必要である。しかしそれ以前に原種豚そのものに疾病が潜在しているようでは上述の努力はまったく実らない。

SPF 豚も最近では第2代～第3代 ( $S_2 \sim S_3$ ) まで繁殖されるようになってきており，その数も幾何級数的に増加しつつある。一方， $S_2$  や  $S_3$  の成績は期待通り非常によい。すなわち，飼料要求率も平均して3.0以下で，大体生後150日内外で90kgに達している。

くりかえし述べるようであるが企業養豚には豚群からの疾病の排除が前提になるが，この意味から SPF 化によってはじめて企業養豚に明るい見通しがついたといっても過言ではない。

ところで，経営というものは非常にきびしいことはいうまでもなく，そこには損失を妥当化する余地はみいだされない。すなわち，あくまで利潤が得られる可能性があってこそ企業として取りあげられるのである。したがって，中途半端なことでは，経営というものが成り立つはずはない。しかしひとたび企業として取りあげた場合，大量生産が要求される。これは一步誤

ると破滅に通ずるからこわい。

常時，頭数1～2万頭養豚はそれ自体飼料を動物蛋白に変える加工工場とみなしてもさしつかえない。したがってそこでは生産性の向上と生産物の均一化が要求される。また生産物の販路の確保も必要になってこよう。

したがって SPF 豚による企業養豚の計画が技術的に確立された場合，つぎの問題はこれをどうやって簡素化された流通機構で消費につながるかを検討しなくてはならない。また自由化された輸入肉との価格競争にどう対応していくかが今後の重要な課題となろう。

このことを考えると流動する業界で単に独占的な企業を固執するのあまり，SPF 豚の技術をいわば一匹狼として世に進出させようとするのはあやまりである。少なくとも企業養豚をめざす人たちにとっては，インテグレーションを考え，種々の方法で組織化する必要がある。ただし，このような組織化が SPF 豚と渾然一体とならなければ企業としての花も咲かないし実らないのではないだろうか。